

## 「故・坂本忠次教授追悼記念号」に寄せて

関西福祉大学 学長 安井 秀作

本学社会福祉学部の研究紀要については、歴史を重ね、この度、第15巻第1号の発刊の運びとなった。この号は、本学の発展に多大な貢献をされてきた「故・坂本忠次教授追悼記念号」として発刊される。

坂本先生は、昭和32年に東京大学文学部西洋史学科を卒業され、その後、法政大学に学ばれ、経済学博士（京都大学）の学位を取得された。昭和54年4月には、岡山大学法文学部教授になられ、同大学の経済学部長、大学院経済学研究科長などの重責を担われて来られた。

本学は、平成9年4月に関西初の福祉系単科大学として誕生したが、先生は、その2年後の平成11年4月、社会福祉学部教授として赴任され、本学の発展のために、長きにわたって盡力されてきた。そして、平成21年4月には、大学院社会福祉学研究科長となられ、研究科の発展にも大きな貢献をされた。本学のこれまでの歩みは、坂本先生とともにあったと言っても過言ではない。

自身の坂本先生と最初の出会いは、本学に学長として赴任する前のことであった。福祉サービスの第三者評価に係わっていた関係から、これまでの取り組みをまとめようと、本の出版を企画したが、私たちだけではとても力不足の感があった。そこで、財政学の権威であられる先生にお願いすればと、研究室を訪問し、企画の意図を説明、編集者をお願いした。先生は、私たちの話にじっと耳を傾け、いくつかの的確な質問をされた後、編集者を快くお引き受け頂いた。

その後、平成22年10月、本学の学長として勤務することとなり、先生と再会することとなった。先生は、私の母校である岡山大学で教鞭をとられ、多くの学生を育ててこられた。ご自身も、世界的に知られる素晴らしい実績を残された。先生を慕う学徒も多い。そのような先生にとって、新米学長は、行政官としての実績はあっても、大学教育の経験は浅く、誠に未熟者と思われたに違いないが、そのような態度を見せることもなく、いつも、にこにこ穏やかな雰囲気の中で、実に正鵠を射た適切なご指導を頂いた。

先生が開設に盡力された社会福祉学研究科については、文科省への報告も無事終わり、先生のご指導の下、新たな第一歩を踏み出せると考えていた矢先、突然の訃報に接した。これからという時に、誠に、無念の想いであった。

先生とのおつき合いは、3ヶ月と10日間と極めて短い間ではあった。しかし、今、思い起こしても、充実した実り豊かな時間でもあった。先生の学問への取り組み姿勢、学生への接し方、仲間の先生たちへの接し方、その一つ一つから、多くのことを学ばせて頂いた。

私たちは、そのような先生の行動を、これからは、一人一人が実践すべきと肝に銘じなければならない。

そして、先生が地道なご努力を重ね、ここまで育て上げられた、私たちの大学をさらに充実させ、地域になくてはならない大学へと仕上げていかなければならない。

そのような決意を述べさせて頂き、「故・坂本忠次教授追悼記念号」に寄せる言葉としたい。

平成23年9月20日

